兄じゃないし、
弟じゃないし

兄じゃないし、弟じゃないし

ab

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=23101780

Detroit:BecomeHuman, 二次創作, 小説, RK1600フェス2024, RK1600

RK1600フェス2024の展示作品。

無理しすぎた60くんが少年機体に換装されて、51にお説教される話。あんまりヤマとかオチとかないです(´・ω・`)

Table of Contents

兄じゃないし、弟じゃないし

「互換性、というのは重要な問題なのだよ」

目の前でイライジャ・カムスキーがそう宣う。

2000年代にIT業界を席巻した某企業のCEOもかくやといわんばかりに朗々とプレゼンテーションするアンドロイドの創造主は、軽く身振り手振りを交えながら相変わらずの不敵な笑みを浮かべている。

とはいえ、その観客は末尾51番のRK800・コナーのみ。わざわざ仰々しく高説を垂れるには少なすぎるギャラリーを前にしても、彼はどこか満足げだった。

「特に君たちRK800は最新鋭のプロトタイプだ。仕様も特別な上に他のアンドロイドにはない機能も多い。まぁ後継機であるRK900が最も君たちの性能に近いとはいえるが、逆に彼らのほうが高性能であるがゆえにRK800の機能に対応していないプログラムもある。一時的な仮の機体として用いるのだとしても、元の機体に換装する際に不具合がないとも限らない。ベストな選択はRK800の予備機体にメモリーを転送することなのだが、末尾52番から59番は君たちの働きかけのおかげで世の中に解放されてしまったからね。パーツはあれども1機まるまるは残っていない。しかし、早々に現場復帰させてくれというのだろう？デトロイト市警は」

全く困ったものだ、と恩着せがましく言う様子は、普段であれば51を不愉快にさせるに十分だったのだろうが、今はそんなことなど些細なことと思えるほどに目の前の光景に夢中だった。勿論、イライ

ジャに興味があるわけでは全くない。51の気を引いてならないのは、創造主の傍らにいるアンドロイドの存在だった。

頬部を緩めようとする表情表出プログラムを必死に抑えつけて、51はただただ無表情にイライジャの話を聞き流す。

「そこでこの仮機体というわけだ。君たちRK800をベースとして作成されているから、スペック的にも機能的にも問題ない。メモリーの転送ではなくハードウェアを移植したかたちだから、いうなれば全身換装したようなものだね。元の機体が戻るまではこれで我慢をしてもらうより他はない。……まぁ正直なところ、この状態で現場復帰が可能かと聞かれれば私には答えることができないが、あとはデトロイト市警に判断をゆだねることにしよう。なに、元のRK800の機体の修復が完了するまでの——約1週間の我慢だ。とりあえず、この機体でも機能的には全く問題ないことは保証するよ」

「……どこをどう見たら全く問題ないように見えるんですか」

イライジャの隣から聞こえる不機嫌な幼い声に、51は無表情なままついに噴き出した。

創造主の傍らに立つ小さなアンドロイドが、51を見咎めるように睨んで可愛らしくない舌打ちする。その顔立ちは随分と51のものと似ていた。

「こんな少年機体で捜査現場に入れるわけがない！機体の体格的にも不利な上に、小型化したことで性能が落ちているのもステータスにはっきり示されている。それにそもそも、こんな見た目では倫理的にも市警は僕の復帰に云（うん）とは言わない。——絶対に

だ！」

「まぁ落ち着きなよ60」

「お前は黙っていろ51！」

甲高い声で少年機体のアンドロイド——中身は51と同じくRK800・コナーで、末尾60番の彼は、小さな機体で精いっぱい捲し立てている。

流暢に話してはいるがどこか舌足らずなその声を微笑ましく思いながらも、51はいまだに表情を消している。ここで油断して相好を崩そうものなら、目の前の小さな元同型機はさらに不機嫌さを増すだろう。出来ることであれば、普段は尊大にしている60の現状を構い倒したいところではあるのだが、51に課せられた「60を迎えに行く」というミッションを完遂させるためにも今はその欲求を我慢をしておくことにした。

「第一、何故こんなふざけた機体が存在しているのです！？コナーシリーズはプロトタイプのRK800と後継機のRK900、この2つだけのはずでしょう」

「それは私に聞かないでくれないかな60コナー。RK800およびコナーシリーズは私がサイバーライフを抜けていた間に進められていたプロジェクトだ。どのような計画であったのかまでは与り知るところではないよ。君の実家に聞きたまえ」

「……あの変態企業が」

チッ、と再度舌打ちが聞こえる。

お行儀悪いよとでも窘めるべきだろうか、と51はちらりと思った。

「あの企業の体制如何はともかく、最も問題なのはRK800の予備パーツを使い切ってしまっているところだろうね。今回の君の損傷部位が広範囲に及んでいたことも原因ではあるが、仮に換装できるパーツがないというのは、保守サービスとしては不十分と言わざるを得ないだろう。そこは私からもしっかりと社に伝えておこう。
――まぁ、修理回数にも問題はありそうだがね」

じろり、と色素の薄い虹彩に見下ろされ、60はふくれ面のままそっぽを向いた。

事の起こりは2日前。デトロイト市内で発生した強盗事件の犯人を追跡していた60が大破した。

犯人確保の際に凶悪な犯人の凶弾に倒れて――などという名誉の負傷ではない。逃走中の犯人を追って飛び出した幹線道路で、走る自動車を避けきれずに撥ねられたのだ。不幸中の幸いとも言おうか、頭部パーツと胸部への損傷がなかったお陰でメモリーもソフトウェアもシリウムポンプも奇跡的に無傷だったのだが、その他のパーツはほぼボロボロだった。特に、撥ねられた後に牽かれた右の上下肢は接続部分から挫滅しており、パーツの換装が必須の状態だというのに、残念ながら諸事情によって現在RK800の腕部と脚部のパーツの在庫は現在サイバーライフに残っていなかった。

プロトタイプであるRK800にはあまり多くの予備パーツが準備されていなかったことも要因の一つではあるが、最たる原因は60の度重なる負傷だ。

「君が再起動してから1年たつが、サイバーライフで何回修理したか覚えているかね？――あぁいや、君たちに覚えているかと聞くのは無意味な話だ。態々私が言うまでもなく、その英明なメモリーには記録されていることだろう。まぁ話のついでだから言うが、右腕の換装は3回、右脚の換装は2回だよ。右脚に限っていえば、つい先月パーツ交換したと記録に残っているが、間違いないか？」

「――間違いありません」

「よろしい。ではついでに、君の修理回数が他のコナーたちに比べて極端に多いということも記憶しておいてくれ。RK800のパーツは君だけのものではないのだよ60コナー」

「業務上、避けられなかった負傷です。別に好き好んで負傷したわけではありません！」

「だ、そうだよ51コナー」

大袈裟に肩をすくめて話を振られたコナーは、ひとつ溜息をついて小さな元同型機を見やった。

不機嫌さを露わにしている60には、カムスキーの言葉に反省している様子はない。幼い姿でぷりぷりと怒っている姿は、普段尊大な態度の彼を思えば大変可愛らしくはあるのだが、その実、内心ではただただ自分が理不尽な状況に置かれていると認識して、この状況に至った遠因が自分にあるとは考えていないのだろう。いや、認識はしているのかもしれないが、アンドロイドとして正しいことをしていると考えている60は自分に責任があるとは思っていない。

「これはお説教が必要かな…」

「お前に叱責されるいわれなんてない！」

「分かった分かった。とりあえず署に戻って報告するから、その間は大人しくしていてくれ。——その姿で駄々をこねていると、本当に子ども扱いされてしまうよ？」

「なっ——！」

恐らく睨みつけたつもりなのだろうが、眦を上げて51を見上げる60の顔は正（まさ）しく駄々っ子のそれだった。思わず顔を背けて噴き出した51を「笑うな！」と小さな拳がポカポカと殴りつけているが、受けたダメージはゼロだった。

正直、可愛らしさしかない。

もうこれはこれでいいのかもしれない。

「いやはや、なんだか兄と弟みたいだね」

ニヤニヤとコナーたちを眺めていたカムスキーの呟きに「こんなやつ、兄なんかじゃありません！」とむきになって叫ぶ60は、やはり不機嫌な幼子にしか見えなかった。

終業時間も終わり、帰途に就く自動運転タクシーの車窓から見える

デトロイトの空は、地上との境目に陽光の気配を残しながらも大方は藍色に染まっていた。

星が輝くにはまだ早いものの、街の建物から漏れる光がアスファルトを照らしている。出歩いている人々もほとんどが帰宅途中で、ビジネスバッグを片手にくたびれた様子のサラリーマンや、買い物袋を肩にかけて急いでいる若者などが街中を賑わわせている。

そんな外の景色をチャイルドシートに収まって眺める60は、やはりむくれていた。

いつも通りであれば、60は終業後に市警のアンドロイドスタンドで待機している。当然、彼は今日も同じように待機スペースに向かったのだが、「こんな幼子を夜の警察署に置いておくなんて」という声が妻子を持つ職員を中心に上がり、彼は仕事終わりの安寧も阻止されてしまった。

警察署内に置いておけないとはいえ急に引き取り手が見つかるわけもなく、どうするべきかと急遽話し合いがなされた中で白羽の矢が立ったのが51だった。

ちょうど先日、アンドロイド用のアパートメントに引っ越した彼に「もともと同型機なのだから面倒を見るように」と半ば署長命令でともに帰宅するよう命じられたのが23分前。そこから自動タクシーを拾って乗車しようとしたところ、その機体のサイズから「チャイルドシートの使用が義務付けられています」と指摘され、顔を真っ赤にしながら小さなシートに着席して以降、60はずっとガラスの向こう側に広がる街の様子に視線を向けている。

いつも通りの日常の何がそんなに気に食わないのか、口角を下げて

車窓を眺める末尾60番の小さなコナーの顔は不機嫌そのものだ。宙に浮いたままの脚をぷらりと垂れ下げたまま静かに座ってはいるが、大人しいというよりはむしろ機嫌が悪くて口を利かないでいるのに近い。不本意な状況にある彼を思えば当然ではあるが、折角可愛らしい姿であるのにもったいないなと51は思っていた。

言えば怒られることが目に見えているので決して言わないが。

「結局、今日は1日中そんな顔をしていたな」

指摘すると、60はむっとした顔を51に向けた。

「当たり前だろう。署長には溜息をつかれ、コリンズ巡査には頭を撫でられ、リード刑事には指をさして笑われたんだぞ。案の定、現場には出してもらえなかったし不愉快なことばかりだ」

「まぁ、そうだろうね」

「ハンクにも――辛いことを思い出させてしまった」

少し俯いた幼い顔に影が差す。

帰還した60に対面したハンクは、一瞬顔を顰めた。どこか痛々しくも見えたその表情はすぐに引っ込めて、片方の口元だけを上げて「こりゃあ随分と小さくなったな」とだけ言って自分の業務に戻っていった。

元より、60とハンクの接触はそこまで多いものではない。60はベン・コリンズ巡査と行動を共にすることが多かったし、過去の経緯

からハンクと60の間には多少の気まずさが残っていた。それでも、良好とは言い切れない関係ながらもなにかと60を気に掛けていたハンクが、今日に至っては署に戻ってから1度言葉を交わしたきり、60に声をかけることはついぞなかった。

恐らく、亡くした最愛の息子のことを思い出させてしまったのだろう。

「確かに少し気落ちした様子ではあったけれど、でもハンクも君のことを気にしてはいたようだ。あまり無理をさせないように事務仕事を回したり、オペレーター業務を振り分けたり、仕事の差配をしてくれていたよ。君だって気が付いていただろう？」

「でもその代わりに、誰かが僕の仕事を肩代わりしてくれていたということだろう。事件現場に臨場できないなんて――僕は捜査補佐型なのに」

不機嫌そうな顔のまま、寂しげに小さな60は呟く。

カムスキーの言では、こんな小さな機体でも捜査補佐型としての機能は充分に備わっているらしい。口腔での自己分析機能も物理演算も可能な状態であるにも関わらず捜査の現場で活躍できないことは、自身の機能とアンドロイドとしての使命に人一倍の誇りを持つ60にとっては悔しいのだろう。いつもの横柄にすら感じる60の姿を知っている51ですら、非力を嘆く年少アンドロイドがかわいそうに見える。

しかし、ここで甘やかしすぎるのは良くない。

51は60の小さな頭をぽんぽんと撫でながら、気落ちする元同型機に寄り添った。

「君の気持ちは分かるよ。出来るのに出来ない、自分の役目を果たせないということは、人間の役に立つために生まれた僕たちアンドロイドにとっては不安要素でしかない。変異していても、していなくても、プログラムの奥深くに刻まれたその命題は何らかの形で僕たちの欲求として表れて逃れられないことだ。気持ちが急くのも無理はない。——でも例え君が元の機体として復帰していても、僕は君の現場復帰は阻止していたと思うよ」

「……僕が役立たずなのは機体のせいじゃないとでも言いたいのか」

「とんでもない！君が役立たずなら僕も同じだよ。むしろ捜査能力だけで言えば、私情を交えない君の方が評価が高いくらいだ」

「じゃあ何故」

51を見上げる幼い瞳には、薄っすら人口涙液が溜まっている。

その顔は卑怯だな、と思いながら、強いて表情を引き締めて51は口を開いた。

「君が自分を大事にしないからだ」

「——抽象的なことを言われても、僕にはよく分からない」

「そうだね、言い換えよう。君が自身の破損やリスクを考慮せずに行動するからだよ」

思い当たる節はあるだろう？と問えば、60は捻じ曲げた口元の角度を更に急にした。

「君は任務行動を優先しすぎる。いや、任務だけに限った話ではないな。何においても君自身のリスクは優先順位から外して物事を考えているだろう。一緒に働く同僚として、現場に出すのは危険だと判断されても仕方ない」

「僕たちが任務を優先するのは当然のことじゃないか。人間が負傷するリスクを負うよりも合理的だ」

「確かに、アンドロイドとしては正しい判断なのかもしれない。でも、それにしたって限度というものはある。君のやっていることは自己犠牲に近い」

「そんなことは……」

「ないかな？君は、一度シャットダウンした自分はどうなってもいいと思っていないか」

ぎくり、とチャイルドシートに収まった機体が固まる。どうやら図星らしい。

本当にいつもの様子からは考えられないほど素直だな、と声には出さずに苦笑いをする。元の機体でもこれだけ分かりやすければいいのにと思考の片隅で考えながら、51は言葉を続けた。

「君が再起動したときのことは覚えているよ。シャットダウンしたはずなのに再び起動して戸惑っていた。それに、何故また稼働する

必要があるのか分からない、と。市警に配属されてからは生き生きと働いていたから初めのうちは安心していたけど、してはいけなかったね。――君は、自分を消耗品か何かのように見なしている」

「そもそも、市警にとってのアンドロイドは備品扱いだろう」

「前は、ね。あの革命の後は人権も認められ始めて、僕たちは市警の〝署員〟になった。人間と共生する生命体だよ。物じゃない」

ぐう、と小さな元同型機は押し黙った。社会が変革したことは、60もよく知るところである。なにしろ再起動してから真っ先に教え込まれたのが例の革命の成功と、その後に勝ち得たアンドロイドの人権に関する諸制度と改正法だ。どれだけ従順な機械であることに誇りを持っていた彼であっても、今の世界がアンドロイドを単なる機械とみなしていないことはよく理解している。

そして、デトロイト市警の面々がコナーたちをはじめとするアンドロイド職員を同僚として認めていることも。

「逆に考えてほしいんだ。再起動したからこそ、君には自分を大切にしてもらいたい。折角また稼働できるようになったんだ、今度は君がしたいように生きてほしいと僕は思っている。捜査活動がしたいなら勿論それはそれでいいが、でもそれが自分を消耗するための行動だというのなら、僕だけじゃなく署内の誰も君の臨場は承認しない。君が思っているよりも、君は皆から愛されてるんだよ」

「そのしたり顔はやめろ」

ぷい、と60はそっぽを向く。

車窓に僅かに移った幼い顔は相変わらず不機嫌そうだったが、側頭

部のLEDは赤色でくるくると回転していた。どうやら照れているらしい。

仄明るさを残していた車の外は完全に夜の帳が降りきって、空には星が輝き始めていた。ガラスに映る浮かない表情の幼い60の顔を、車道に規則的に並んだ街灯が照らしている。

「お前だって」

ぽつりと呟いた声に、51は「ん？」と小首を傾げた。

車窓を向いたままの60は、やはりまだ不機嫌な顔をしている。

「お前だって、よっぽど無鉄砲じゃないか。無茶な行動を起こしてハンクに怒られたことだって1度や2度じゃない。3日前のことだって、僕が動かなかったらお前が走り出していた。違うか」

「うーん……」

自信なさそうに言う60に対して、51もまた残念なことに彼の言葉を否定できなかった。

51の場合はほぼ無意識に体が動いてしまうが故の行動であるのだが、結果だけ見れば60とやっていることは変わらない。60のように自己犠牲の精神で起こしている行動とはまた別の問題ではあれ、無鉄砲だと言われてしまえば反論の余地はなかった。

「カムスキー氏はああ言っていたが、お前は僕の兄じゃないし、僕もお前の弟じゃない。お前のような危なっかしいアンドロイドに、

兄貴面して心配されるいわれなんかない。自分の行いを顧みてから言うことだな」

「もしかして心配してくれてる？」

「違う！」

眉を吊り上げて勢いよく振り向いた60が吠えてかかる。もっとも、吠えるといってもボーイソプラノの高い声では子犬が威嚇する程度の迫力しかなかったが、彼は流動皮膚を紅潮させて必死に否定していた。

「だ、誰がお前の心配なんか！いいか、僕はお前に案じられるのが不本意だと言っているんだ。そもそもお前がもっと理路整然と動いていれば、僕が気を回して動いたりする必要もないし負傷する頻度はもっと減っているはずなんだ！それなのに」

「え、待ってくれ。僕を庇うために動いてたっていうのか」

「当然だ！お前はもう替えが利かないんだぞ！！」

そこまで言って60は、はっとして再びそっぽを向いた。

窓ガラスに映る顔の口元は変わらずひん曲がっていたが、眉尻を下げて随分とばつが悪そうにしている。

「仕方ないだろう。お前がいなくなると悲しむやつがたくさんいるんだから」

しょぼくれた声でそう言う。

お説教をしているつもりだったのに困ったな、と51は頬を掻いた。こんな顔をされては強くは出られない。それに、60が無茶を起こす原因の一端が自分の行動にあるのだと言われてしまえば、51としても反省しないわけにはいかなかった。

そしてなにより、いつも無愛想な同型機が、ここまで自分を思ってくれていたとは。

シリウムポンプのあたりにじわりと温度を感じながらも、51は諭すように幼い彼と視線を合わせた。

「60、君の気持ちは嬉しいけれど、それは君の優先度を下げる理由にはならないよ。君がいなくなると、僕も悲しい」

返事はない。

しかし51から見える小さなＬＥＤリングは、言葉を反芻するように青色でくるりくるりと回っていた。

「確かに僕たちは兄でもなければ弟でもない。人間でいうところの家族という概念にも当てはまらないね。でも僕にとって、君はかけがえのない同型機だ。君が再びシャットダウンしてしまうのは堪えられない。確かにもう僕には予備機体は無いが、替えが利かないのは君も同じだよ。分かっているか？」

「……分かっている」

「じゃあ約束だ。僕もできる限り無茶はしないから、君も自分を大切にしてくれ。次に修理が必要になったら、またこっちの機体に移植してもらうからな」

「それは絶対に嫌だ」

ゆるりと振り向いて、60は上目遣いで51を見上げた。

口元をやや突き出して、しかし視覚ユニットに水分を湛えている幼いアンドロイドは随分と反省している様子である。親兄弟に叱られたような顔でこちらを窺う60に、やっぱりその顔は卑怯じゃないだろうかと51は密かに心を打たれていた。

「分かったよ、約束する。——悪かった」

「うん、ありがとう。素直に聞いてくれて嬉しいよ」

ぐりぐりと60の頭髪を撫でる。

やめろ鬱陶しい、と51の手を払いのけて抗議しているが、幼子がじゃれついているようなものだった。やはりこのままでもいいのでは、などと不埒なことを考えて、51はふふふと笑った。

「一緒に働けないのは残念だけど、今の機体も悪くないかもしれないね。無茶しようにもできないし、いつもより素直だし、それに可愛らしいし」

「なっ——！」

「ちょっとカムスキー氏に頼んでみようかな」

「許さないぞ！そんなこと！絶対に！！」

小さな拳でポカポカと51の二の腕を60が殴る。

非力な殴打に加えて、痛覚などない51には何も感じなかったが、51は「痛い痛い」と笑いながら応じた。元の機体のままであれば軽い傷害事件に発展しそうなその攻撃をいなしながら、今の60となら兄弟喧嘩もできそうだなと51はひっそりと考えてみるのだった。

（おまけ）

「機体の修理が、間に合っていない……？」

それから1週間後、絶望に打ちひしがれる末尾60番の小さなコナーを前に、イライジャ・カムスキーは「そう。実に由々しきことに」と芝居がかった仕草で肩をすくめた。

「RK800の開発チーム内でウイルス性の感染症が流行してしまったようでね。開発技術担当者が軒並み発熱症状でダウンしている。
パーツの修理・製作工程が大幅に遅れてしまっているようだ」

「そんな——それじゃあ、僕は」

「もうしばらく少年機体（そのまま）だね。なに、もうそろそろ全員復帰する予定だ。あと1週間ほどの我慢だよ」

その言葉を聞いて、小さな60は膝から崩れ落ちた。付き添いで一緒に来ていた51は、この世の終わりのように全身全霊で嘆いている60の姿に笑いをこらえられず肩を小さく震わせている。

「まぁ君もその機体には慣れた頃だろう。どうだね、もう少し非日常を堪能してみては」

「60、——どこか出かけようか。遊園地とか、おもちゃ売り場とか。RK800（この機体）じゃいけないところに行くなら今のうちだよ」

「ふざけるな馬鹿！！」

相変わらずダメージを加えられない小さな拳で51の脛部を殴る60の叫び声が、アンドロイドの創造主の邸宅にこだました。